

学校推薦型選抜解答例

令和4年度

小論文

● 回答例と評価の観点

問一

合意形成がとりやすいように思われる社会では、議論とは成否を決めるためのプロセス、あるいは意見を納得してもらうための論争という形を取りやすい。だが、それは文化や倫理面において同じ傾向を有する人々が多い社会においてしか有効ではない。だが、そういった社会は稀であり、文化や国家体制が違えば、基本的な倫理すら意見の総意を得るのが難しいというのが普通である。そうした多文化の共生社会においては、宗教、内面、良心の自由など様々な面で、バラバラな個性を持った人間が、全員で社会を構成していかねばならない。だから個々がアウトプットすることは必要なことだが、その形式や範囲を出来るだけ規制せずに表現してゆくことが出来る環境を保証してゆくことが重要である。それと同時に、単なる意見を出し合う力ではなく、それらの意見を互いに聞き、そして自分の意見と比較し、多様な意見をうまくまとめあげる力が必要となる。(393字)

①多文化社会における合意形成のポイントをおさえているか。

②多文化社会に求められる能力と、それ以外の社会において尊重される能力の違いをおさえているか。

問二

課題文では、大人は、夫／妻という役割、父親／母親という役割、会社員という役割、親と同居しているれば子どもという役割など様々な役割を演じながら生きていくと述べている。確かに、その通りであろう。事実、まだ立派な大人とは言いがたい我々でさえも、日常生活において様々な役割を演じている。

よく「本当の自分」という言葉がある。進路指導などの現場で、自分の「本当」と向き合って、「本当」の自分を捜しなさいと指導して頂く。表層的ではないレベルで自己の内面と向き合うのは必要なことなのだろうが、同時に、こうした「本当」は、無理に「演じる」社会のなかでこそ生じたものである様な気がする。

演劇の世界、あるいは心理学の世界では、この演じるべき役割を「ペルソナ」と呼ぶそうだが、ペルソナという単語には、「仮面」という意味と、*person* の語源となった「人格」という意味が含まれているのだとすれば、両者には同じ側面があることになる。つまり、「仮面」は意図的に選択してかぶるものであるが、それは他者から見れば、結果的にはその人そのものになるということだ。「仮面」がその人であるならば、「仮面」の裏側が何であつても関係ない。我々は、常に社会の色々な場面で、最も適切な「仮面」を選び、それをかぶり続けたいからだ。

私たちは、こうした感覚を「キャラ」という言葉で現す。「キャラ」というのは仮構であるという側面があることは確かだが、どんな場面でも通じるような立派な「わたし」など手に入るはずもない。むしろ、それが永続的に続く「本当」なのではなくとも、そこに応じた「キャラ」をしっかりと演じてゆこうとすることは、現代社会のある種の処世術とも言えるのではないだろうか。

私は教師という立場になったら、生徒たちに、「本当」の私などよりも、「キャラ」で構わないから、しなやかに様々なペルソナを使い分ける力を養って欲しいと思っっている。どれか一つが本当なのではない。本当を限定してしまえば、それが壊れてしまえば終わりだ。私は沢山あって、そのどれもが壊れたら作り直せば良い。そんな新しい「私」を提供することが出来ないだろうかと考えている。(880字)

課題文の「演じる」と教育の関係を的確にとらえ、自分なりの教育観と結びつけて表現できているか。